全体を通して個を見る
個々の関係性から全体を見る環境・プロダクトデザイナー

長谷 高史
Takashi NAGATANI

長谷高史デザイン事務所 代表
愛知県立芸術大学 名誉教授

環境デザインの領域を土木、都市計画、造園、建築、インテリア、工業・グラフィックデザインまで広げる考えを示した長谷高史氏。土木、公共建造物の整備におけるデザイン的アプローチは、後の都市開発の手法を変えた。

学生時代に起業して企業と仕事

工業デザインから環境デザインへ

東京藝大では工業デザインを学び、時は高度成長期の1960年代後半。日本中が大阪万博開催に沸き、その万博準備のデザインで中心的な活躍をしていたのがGKインダストリアルデザイン研究所です。GKで1年生の時にアルバイトをしていた私は、万博のストリートファニチャーを統括していた西沢健氏から環境デザインの素晴らしさを教えていただきました。

2年の後期には子ども向け雑誌の付録デザインも。藝大仲間で作った付録は毎回大好評でした。後に毎月入る定期収入から「株式会社サンク環境設計」を立ち上げたのです。経済成長率が年間10%を超す時代、様々な仕事の依頼がありました。大学では大学紛争真っ只中、毎回出される課題について小池岩太郎教授をはじめとする教授陣に課題の意図や評価を問い続け、挙句には藝大の山小屋に2泊3日軟禁し、自己批判を迫っていました。自主課題で1年通し、今では考えられない暴挙でした。

大学4年時、当時若手デザイナーの登竜門だった「ブラウン賞」の国際コンペに「病院の環境デザイン」というテーマで挑戦しました。。可動する壁面という考え方で、ベッドの機能性を追求してプロダクト化した、ユニバーサルデザインの提案でした。結果、入選はしたものの受賞にはおよびませんでした。しかし、空間や機能性、人のコミュニケーションについて学び、この時に、人とモノと場の関係性を追求するという考え方が養われたと思います。

藝大がデザイン分野を拡大

環境造形デザイン講座を立ち上げる

大学院を修了して就職という考えは頭にありませんでした。しかし仲間たちとはそれぞれ進路が異なり、サンク環境設計は解散、私は藝大大学院を修了し研究生へと進みました。

助手になって2年目、東京藝大工芸科デザイン専攻は講座を工業デザイン、環境デザイン、形成デザイン、構成デザイン、視覚伝達デザインの5講座に再編成する構想を立てました。そこで、環境デザイン講座の立ち上げに携わることになった私は、稲次敏郎助教授(当時)のもと、「人とモノと形の美しく心地よい関係づくり」をコンセプトに「環境デザイン講座」を計画しました。早速、文部省に申請したのですが、当初、東京藝大で環境デザインをやるということはなかなか理解してもらえませんでした。紆余曲折を経て、藝大で環境をやるのなら芸術に関係する語句を入れるように、との指導を受けて、「環境造形デザイン講座」が誕生したのです。私はここで講師をし、以後、環境デザインの啓蒙と実践に努めました。「長谷高史デザイン事務所」を立ち上げたのもこの頃のことです。

多様な視点からモノを見て

あるべき姿を追求する

環境デザインとは、一言で説明しにくいものです。一つひとつのモノが美しいだけでなく、それらが同調して織り成すよい関係が、空間の心地よさを生む。空間に適したモノとモノとの関係づくりが環境デザインの基本であり、また、多様な視点から一つのモノを見ることで、全体のあるべき姿が導き出されてきます。

こうした視点で見ると道具、家具、家、街、広場、ダムや橋のデザインにも同じことがいえます。例えば橋をデザインする場合、使いやすさ、走りやすさという機能性に加えて、計画全体における橋の位置づけまでを考えます。1980年代、こんな話を建設省(当時)にしたところ、幸いにも企画部長の賛同を得られ、建設省のこれからの施策にはデザイン思考が必要だ、ということになり、土木デザインプロセス調査研究がスタート。数年かけて全国の建設局の役職以上に研修を実施し、広報誌『デザイン・アイ』を企画編集しました。こうして皆さんの意識の高まりと行動力で環境デザインの理解が広まり、建設省のデザイン施策に関わらせていただくようになったのです。

当時、建設省関東地方整備局は「八ッ場ダム問題」を抱えていました。「デザイン的アプローチで地元の理解を得ることができないか」という相談を受けた私は早速、対外的な説明資料を確認すると、これがデータばかり。地元の人たちにとって気がかりなのは家族や地域の将来です。これでは理解を得られるはずがありません。そこで私は、新しい暮らしを地元の人たちがイメージできるツールを提案し作成しました。図面やデータはイラストに、1000分の1スケールの模型を地域ごとに作り、各所にコミュニケーションセンターを設置して、資料と模型と相談員を置き、住民対応を行いました。そしてようやく地元の理解を得られたのです。この時、ダム

■ながたに たかし　プロフィール

長谷高史デザイン事務所 代表
愛知県立芸術大学 名誉教授
日本インダストリアルデザイナー協会(JIDA) 永年会員/監事
日本デザイン学会(JSSD) 名誉会員
日本都市環境デザイン会議(JUDI) 特別会員
東京国立博物館 客員研究員
東京藝術大学卒環境デザイン研究会 代表幹事
放送大学 講師

略歴
1947 東京生まれ
1972 東京藝術大学美術学部工芸科デザイン卒業
　株式会社サンク環境設計 設立
1974 東京藝術大学大学院美術研究科デザイン修了
　(芸術修士)
1975 東京藝術大学美術学部デザイン研究生修了
1975 東京藝術大学美術学部 非常勤助手(〜'80)
1975 文部省中等局専門教育研修会 講師(住環境担当)
　(〜'80)
1980 東京藝術大学美術学部 非常勤講師(〜'94)
1980 長谷高史デザイン事務所 設立
1983 デンマーク政府招請デンマークデザインセミナー参加
1984 中国建築学会招請 中国住環境デザイン調査
1986 NAGATANI DESIGN MILANO設立
1986 建設省欧州ダム環境調査団 副団長
1988 建設省魅力ある建設事業懇談会 委員
1989 世界デザイン会議名古屋
　(プログラム委員セッションディレクター)
1990 新潟県景観検討懇談会 委員
1991 八ッ場ダム環境デザイン検討懇談会 副委員長(〜'04)
1992 建設省横浜国道景観検討委員会 委員
1993 建設省都市における快適な色彩検討委員会 委員
1994 東京都文京区景観懇談会 委員
1998 外務省ODAインドネシアデザイン振興計画
　デザイン教育担当(〜'01)
1999 愛知県立芸術大学 常勤講師(〜'04)
2002 早稲田大学 非常勤講師(〜'09)
2002 東京国立博物館 客員研究員(〜'19)
2003 宮城県立大学 非常勤講師(〜'07)
2004 愛知県立芸術大学 教授
2006 文科省大学設置審議会 専門委員(〜'11)
2007 愛知県立芸術大学 美術学部長兼研究科長(〜'11)
2007 愛知公立大学法人経営審議会 委員(〜'11)
　学位授与機構 大学評価専門委員(〜'18)
2009 日韓高等芸術教育シンポジウム 講師(韓国ソウル市)
2010 日中高等芸術教育シンポジウム 講師(中国北京市)
2013 愛知県立芸術大学 名誉教授

賞歴
1970 東京藝術大学 安宅賞
1972 ブラウン賞 入選
1979 静岡県家具コンペ 銀賞
1982 Gマーク受賞
1983 都バスコンペ グランプリ
　インテリアデザイン賞
　ジャパンショップ商工理事長賞
1984 Gマーク受賞
1985 日本デザイン学会 作品賞
1991 静岡県景観賞
1994 建設省RAC賞 グランプリ
1997 Gマーク ロングライフ賞
2005 日本デザイン学会 年間作品賞
2010 パルマレンコ芸術祭 特別賞(伊)
他　多数